

# 関東大震災 藤沢の被害を見る

■アジア防災センター理事長 小川雄二郎

私が生まれたのは西暦一九四四年、関東大震災から二一年目に生まれた。今年生まれた子どもは阪神・淡路大震災が起きてから二八年経って生まれている。今の子どもにとっての阪神・淡路大震災は、私にとっての関東大震災よりもっと遠い昔の話のことである。

災害の被害、教訓などが次の世代に伝わって当たり前だと思っているうちに、意図的に伝えなければ何も伝わらなくなってしまう。

関東大震災は東京に住む人にとっては防災の原点。自分も五八歳で神奈川県藤沢市に引越すまで東京がすべてであった。関東大震災の被害についても東京以外のことは気にしてこなかったが、藤沢に住んでみて、藤沢で

は何か起きたのか知らないことに気が付いた。そこで相模湾沿岸の被害を紹介しようと思いが、相模湾も広く長いので、私が住む藤沢に限って被害の紹介をすることとした。

## ■湘南の地形地質

図1は神奈川県内の地形区分図である。相模湾には小田原平野で酒匂川が、茅ヶ崎で相模川が、藤沢で引地川と境川が流れている。藤沢は相模平野の東側から江の島あたりまでである。ちょうどそこは沿岸部が湘南砂丘地帯と書かれている砂丘地帯であり、その北には相模野台地と書かれている関東ローム層の大地が広がっている。その東西には、東は境川

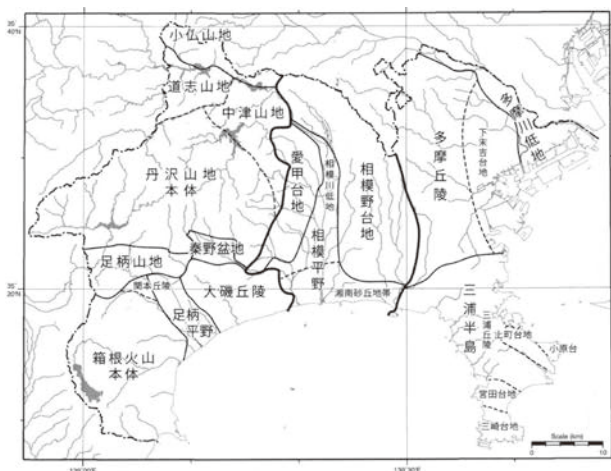


図1 神奈川県内の地形区分

関東大震災100年

幾多の災害を乗り越えてきた東京  
備えよう、明日の防災

が、また西には相模川が流れている。すなわち藤沢は相模平野から内陸部が相模野台地のローム層、海岸部が湘南砂丘地帯の沖積層でできている。このことは藤沢の沿岸部は液状化現象等の地盤変動が起きやすい地形であることを意味している。

## ■藤沢市について

藤沢市は相模湾の江の島を東端として鎌倉市、横浜市と接し、西側は茅ヶ崎市や寒川町に接している。南は相模湾に面していて、北部は綾瀬市、海老名市、大和市に接している。市の南北を小田急線が、東西にはJR東海道線が走る。

しかしながら関東大震災のころは藤沢市ではなく藤沢町と言い、現在の藤沢市のほぼ南半分の地域であった。その昔は藤沢宿であり、江戸日本橋から数えて六番目の宿場である。東海道を戸塚のほうから遊行寺の坂を下ると藤沢宿となる。藤沢宿は西に向かうと東海道（小田原へ）、北西に向かうと大山道（大山阿夫利神社へ）、北北西に向かうと厚木道、北へ向かうと八王子道（滝山街道）、南に下ると江の島道（江の島神社へ）、遊行寺前で東に向かうと鎌倉道、と七方向に向かう街道

の要所であった。

## ■被害を把握する基礎資料

藤沢市文書館は『関東大震災と藤沢(上)』と題する藤沢市史料集(三十六)と『関東大震災と藤沢(下)』と題する藤沢市史料集(三十七)を編集・発行している。本稿を起すにあたってはこの二つの史料集に大きく依存している。これらの資料に収録されている以下の二つの文献に具体的な被害状況が示されている。一つは①『震災誌』(仙田四五郎著)と②『関東大震災特に鶴沼海岸別荘地における状況』(阿部良夫著)である。また藤沢町の被害を撮影した写真資料として③『藤沢町大震災写真真帖』(神田写真館発行)がある。

①『震災誌』の著者・仙田四五郎は被災当時の藤沢小学校の校長であり、仙田氏の体験報告及び児童・教員などの作品を集めたものである。ここではこれを「仙田史料」としておく。

②『関東大震災特に鶴沼海岸別荘地における状況』の著者・阿部良夫氏は東京帝国大学理学部理論物理学科を一九二二年に卒業し早稲田高等学院で教鞭をとられた方で、藤沢の鶴沼海岸に住んでいて、その震災体験

を寺田寅彦の求めに応じて書かれた資料であるという。ここではこれを「阿部史料」としておく。

③『藤沢町大震災写真真帖』は神田善四郎、芳蔵兄弟の共同の成果として作られ、JR藤沢駅前にあった神田写真館が印刷・刊行したものである。

## ■津波による被害

湘南の海岸に津波は押し寄せたのであろうか。阿部史料には鶴沼海岸にあった東屋旅館の津波の状況がある。「津波は地震の数分後に一回来た。平常の渚から凡そ二町乃至二町半ほど迄来た。但し土地の高低及び道路の關係上一様にいふことは出来ない。東屋(旅館)では庭の小松の高さ位、又家の床上二尺余り位の高さに上がり畳(地震でつぶれなかつた家の)が流された。その後水はしばらく引いて一時半頃には東屋の庭で足の「くるぶし」より一寸五分ほど上をひたす程度になった。砂濱とこれに平行な道路とがもと三、四尺餘の高低の差のあったものが浪のために略平になった。松等の樹木は陸地の側に傾いて居る。家で流されたものは殆どない。夫故津浪は大速度で来たのではなく、引くときも亦



写真1 東屋旅館の碑



写真2 東屋旅館の現在の標高



図2 関東大震災再来型津波浸水域図上に示す 鶴沼海岸にあった東屋旅館の位置

穏に徐々であったものと推測せられる。」<sup>vi</sup>

東屋旅館は一八九七年から一九三九年まで鶴沼海岸にあった旅館である。現在の小田急線鶴沼海岸駅の南側に二万㎡ほどの広い敷地があった。現在は旅館の記念碑があり、場所の特定ができる。東屋旅館の記念碑は写真1であり、写真2は東屋旅館敷地東南の門の現在の標高で二・七mである。

この記述によると海岸からそれほど奥まで津波は届いておらず床上六〇cmほどまで水が来たとある。庭の砂丘が波にさらわれて平

らになったとしている。平成二一年三月に藤沢市が発行した藤沢市津波ハザードマップでは、この地域の想定地震として関東大震災再来型である南関東地震が想定対象となっている。この地図上に鶴沼海岸の東屋旅館の位置を示したのが図2である。

### ■地盤の変状（液状化現象）

最初に述べたように藤沢の沿岸部は湘南砂丘地帯と言われるところである。そこに境川と引地川が入っている。砂丘地帯の幅は海岸

部からほぼ4km程度であり、その北は相模野台地である。すなわち砂丘地帯である藤沢の沿岸部は液状化現象をはじめとする様々な地盤変動が容易に起きるところである。

液状化現象が述べられているのは仙田史料である。

「震災後の一日、私は此の海岸別荘地の様子を見に行ったことがある。電車を降りてあちらこちら歩いてみたが、実にひどいものだ。地面はいたるところ隆起し陥没し亀裂を生じて激震の当時からありありと物語っている。白い砂の上に枝ぶりよく栄えていた松は右に左

に傾き倒れて根をあらわしてゐる。(中略) 四辺の井戸や池は下から噴き出した砂で大ていは埋つてゐた。地震の時は井戸や池ばかりでなく海岸一帯の土地がぶくぶくに弛んで至るところから水を噴き出したそうである。『鶴沼海岸は方々から水が噴き出して大洪水だ。』というのがあの当時専らの噂であつた。』

### ■地盤の変状(斜面の崩壊)

藤沢宿の中心部にあたる遊行寺の大鋸橋(現在の遊行寺橋)から大正橋に至る境川沿いの川岸地区の家屋が境川に崩落した記述が仙田資料にある。

(一) 川岸の県道「全く大鋸橋付近の惨状というものは目もあてられなかつた。川沿いの県道は一町半程の間、崩壊して立ち並んでいた家と一処に、川の中に崩れ落ちてしまつた。平らであつた道路は上がつたり、下がつたり坂が出来てしまつた。震災後当分の間は車馬の通行は困難であつた。藤沢劇場の近所も大分ひどくなつた。新道と庚申堂との境のところが四五尺ほど陥落して自転車などで気無しに飛ばすのはとても危険であつた。』写真3は川岸の家屋の河川への崩壊の状況である。ちなみに写真4は

現在の川岸付近の境川を藤沢橋から下流に向かつて見た写真である。

(二) 石上から鶴沼海岸に至る町道「此の道路の家でも殊にひどくなつたのは革袋停留場から線路に沿つた二町ほどの間である。

(中略) それにもせよ、あの惨状を見ては誰も驚愕せずにはいられない。水の面よりは一問半ほども高かつた土砂がずるずると滑り広がつてほとんど水面と等しいまでに



写真3 関東大震災時の川岸付近の状況

なつてしまつた。旧境川の中には緑の葦が生繁つていたのだが、滑り込んだ土砂のためには半ば埋められてしまつた。そして道路は形もないようになってしまつた。』(藤沢市史料集(三十六)二六頁)

川岸の家もろとも河川に崩落したところを仙田さんは九月四日に通りかかつている(藤沢市史料集(三十六)二九頁)。「四日の朝であつたか、私は此の川岸を通つたこ



写真4 現在の藤沢橋から川岸を望む

とがあった。話よりひどいなと思いつらそこのの様子を眺めた。あたりはひっそりとしてただ潰れ落ちた家の間を流れる川水の音のみ聞こえた。ふと見ると、半ば水に浸った家の屋根上に一人の児どもが立っていた。児どもは如何にも力なさそうに流れゆく水の表を眺めていた。悄然としてゐる其の様子が如何にもいぢらしく見えたので、『何をしてゐるの?』と、私はきいて見た。と其の子は驚愕したらしく顔を上げたが、またすぐ俯いてしまった。そしてすすり泣き乍ら言った。

『まだ此の中に……うちの……お母さんが……』児どもは動こうとしない。両手で涙をふきながら其の屋根上に腰を下ろすのであった。私はあまりの痛々しさに慰むる言葉さえ出なかった。(藤沢市史料集(三十六)二九頁)

### ■建物被害及び人的被害

関東大震災による藤沢市の建物被害について、仙田史料に藤沢町震害一覧表<sup>xi</sup>としてまとめられている。表1は表頭の項目の順を一部変更して示している。

この表によると、建物被害の数値が世帯数

で表されており、棟数ではないのであるが、藤沢町の建物世帯総数三四三八世帯に対して全壊世帯は一〇九九世帯で、これを全壊率とみなすと、全壊率は三二・〇%となる。全壊、半壊、一部損壊までを含めると被災世帯率は九三・二%となり、非常に高い被害率である。その他、全焼一世帯、流失が六世帯となっている。

人的被害については、当時の藤沢町人口は一万九〇〇〇人との資料があるので、人口当たりの死亡率は一〇四人／一万九〇〇〇人で〇・五五%である。また死者、重傷者、軽症者の合計で死傷率は一・七%となる。

地震による被害写真として、写真5に遊行寺の被害写真<sup>xii</sup>を示す。

表1 藤沢町震害一覧表 (筆者により表頭順を一部変更)

	全 壊	半 壊	一部損	全 焼	半 焼	流 失	無被害	合 計
世帯数	1,099	1,219	889	1	0	6	224	3,438
死 者	65	14	17	0	0	5	3	104
重傷者	57	13	2	0	0	2	1	75
軽症者	75	38	19	0	0	6	3	141

### ■火災

藤沢町における関東大震災時の火災の記録は、被害の一覧に全焼一世帯、半焼0世帯とある。そして仙田史料の震災誌の彙纂(取りまとめの意)には建物被害の学校のところに藤沢中学校全焼とある(藤沢市史料集(三十六)二四頁)。藤沢中学校とは私立藤沢中学校(現藤嶺学園藤沢中学校・高等学校)である。被害一覧の全焼一世帯と藤沢中学校の火災が同一の火災かは不明である。藤沢中学校



写真5 全壊した遊行寺

表2 学校、役所、寺社の全壊、半壊別被害<sup>xiii</sup>

	全 壊	半 壊
学 校	藤沢小学校、明治小学校、 鶴沼小学校、藤沢中学校 (全焼)	湘南実科女学校
役 所	藤沢郵便局、藤沢停車場、 辻堂停車場	高座郡役所、藤沢警察署、 藤沢町役場、藤沢税務署
寺 社	郷社大庭神社、諏訪神社 (藤沢)、遊行寺、妙善寺、 永勝寺、眞源寺、莊厳寺、 成就院(大庭)、泉秋寺、 宗賢院、寶泉寺(辻堂)、 法照寺(鶴沼)、尼寺慈教 庵(鶴沼)	諏訪神社(辻堂)、皇大神 宮(鶴沼)、白幡神社、常 光寺、感應院

の火災は地震の後に理科室からの出火といわ  
れているがこの詳細も不明である。

### ■学校、役場、寺社の被害

学校、役場、寺社の被害について、全壊と  
半壊について表2に示す。これらは仙田史料  
に記載されている(藤沢市史料集(三十六)  
二四頁)。ただし学校、役所、寺社の藤沢町  
内の総数についての記述がないために母数が  
不明である。

しかしながら藤沢町の規模を考えた場合に  
これら被害を受けた学校、役場、寺社はその  
当時の施設の大部分を占めていることは確実  
で、世帯数から見た建物被害の被災率は実に  
九三%に上ることを見ても、施設被害がいか  
に大きかったかがわかる。

### ■橋梁の被害

境川および引地川にかかる架橋は多くが被  
害を受けた。仙田史料に陥没、大破した藤沢  
町の橋の一覧表がある。<sup>xiv</sup>

陥没した橋は大鋸橋、立石橋、鷹匠橋(大  
庭)、日出橋(辻堂)、エンマ橋(鶴沼)、大  
道橋、大破した橋は御殿橋、船久保橋、大正  
橋、善行橋、寶橋(大庭)、引地橋が挙げら  
れており、その他の橋梁もことごとく修繕し  
なければならぬので、町当局はこれ  
らの復旧費補助を内務省に申請して  
いる。

### ■水道管被害

関東大震災時には藤沢町に上水道  
施設はなかったが、横須賀軍港水道  
(半原系統)が関東大震災で被害を受  
けた。藤沢市史料集(三十六)では『横



写真6 直線に付設されてあった  
鉄管が大きく「カーブ」したもの  
(藤沢町大坂山)

須賀市水道史』からの転載としてその状況を  
次のように述べている。「藤沢市域を通って  
いた軍港水道(半原系統)は、海軍が直接運  
営に当たっていたが、五三キロに及ぶ送水距  
離をもち、相模川をはじめ大小河川の伏越し  
部分や掛け渡し部分も多く、各所で大損害を  
被った。特に被害が大きかった箇所は、海老  
名耕地(現・海老名市内)と藤沢市域の土地  
軟弱箇所、鉄管の破損や接続部などの離脱  
など多数発生した。(中略)海軍当局は昼夜  
兼行で復旧に努め、大正一二年一二月末には  
その大半が完了した。しかし大正一三年一月  
一五日の地震により復旧部分までもが破壊さ  
れ藤沢以西の地域では九月一日よりも被害が  
大きな箇所が出る有様であった。」<sup>xv</sup>

写真6、7は藤沢町における横須賀軍港水



写真7 鉄管が大きく移動したもの  
(藤沢町大坂山)

道の地中送水管の破損写真である。写真6は、本来直線で敷設されているにもかかわらず地震により大きくカーブしている。これは地盤自体が大きく円弧を描くように地盤変状したためと考えられる。写真7は手前の管がほぼ直角に動かされている。これは鉄管の敷設方向に対して横方向の地盤の変動によると考えられる。藤沢町大坂山は現在の藤沢市立石一丁目あたりである。

現在でも藤沢市を含む相模湾沿岸部の都市はその水源をほぼ相模川から取水している。それらの施設は沖積層の軟弱地盤に多く設置されており、このことは、水道施設をはじめとするライフラインは地震動による地盤変状の影響を関東大震災と同じように今後も受ける危険は高い。

## ■まとめ

以上、関東大震災の藤沢の被害を見てきた。

①津波は発生したが、沿岸部の河口付近からそれほどは遡上していない。標高三m程度のところで床上程度の浸水が見られた（鶴沼海岸駅近く）。

②液状化現象は沿岸部で大きく発生し、沿岸から4km程度内陸でも地盤変動が大きく生じている。

③建物の被害程度は全壊率が三二%程度あり、被害を受けた建物の割合も九三%あったようである。

④橋梁の落下、埋設水道管の被害もあった。

⑤火災は発生が少なく、記録上は学校が一枚全焼したとの記録があるが、詳細は不明であった。

総じて、津波の被害、火災の被害は少ないが、地盤が沖積層であり、砂丘地帯であることから液状化、流動化等が多く見られ、当時は上水道がなかったために明らかになっていないが、現在であれば地盤変状に伴う被害が大きくなると思われる。

現在の藤沢市の沿岸地域の人々の最大の関心事は津波である。しかしながら関東大震災

の藤沢地域の被害を見ると、砂丘地帯の上に藤沢市沿岸部が構築されており、大正時代から昭和前半までは日本、米国の軍用地であった藤沢市から茅ヶ崎市の海岸部分の砂丘地帯は道路等の基盤整備が遅れているうえ、それらの土地はほぼ全て宅地化している。この状況では地震による地盤変状の影響、例えば液状化現象による家屋の不等沈下、上下水道のみならず電力や物流、人の移動など様々な影響が我々の生活に及んでくることに改めて気づかされる。

- i 「秋季特別展図録「神奈川県の大地——1億年の記憶」平塚市博物館、二〇二一年一月三日、四頁から転載
- ii 『藤沢市史料集（三十二） 関東大震災と藤沢（上）』藤沢市文書館、二〇二二年三月三〇日
- iii 『藤沢市史料集（三十七） 関東大震災と藤沢（下）』藤沢市文書館、二〇一三年三月二九日
- iv 仙田四五郎「震災誌」、藤沢小学校、大正一三年九月一日
- v 阿部良夫「関東大震災特に鶴沼海岸別荘地における状況」、増訂科学雑誌、岩波書店、昭和一五年八月三〇日
- vi 神田善四郎・芳蔵「藤沢町大震災写真帖」、神田写真館、一九二四年一月、藤沢市文書館
- vii 阿部良夫「関東大震災特に鶴沼海岸別荘地における状況」、一三〇～一三二頁（国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」で全文閲覧可能）
- viii 『藤沢市史料集（三十六）』二九～三〇頁
- ix 『藤沢市史料集（三十六）』二六頁
- x 『藤沢町大震災写真帖』藤沢市文書館
- xi 『藤沢市史料集（三十六）』二二頁
- xii 『藤沢町大震災写真帖』藤沢市文書館
- xiii 『藤沢市史料集（三十六）』二四頁
- xiv 『藤沢市史料集（三十六）』二七頁
- xv 『藤沢市史料集（三十六）』一五頁
- xvi 『横須賀市水道史』横須賀市上下水道局、一九七五年、一三五頁から転載